

アメリカにおけるエリア・カザン研究の動向と カザンゆかりの土地を訪ねて

村 川 英

【要旨】

2009年、エリア・カザンが生誕百周年を迎えた。その前後のアメリカにおけるエリア・カザン研究を報告する。評論家やエリア・カザン研究者の著作、アメリカの大学でのカザン研究者の動向を踏まえて、具体的にエリア・カザン研究が現在、どのようなものになっているかを分析する。またウエスレヤン大学のエリア・カザン・アーカイヴに寄贈された資料について報告する。

同時にこれまで筆者が関わってきたアメリカ演劇との出会い、エリア・カザンのインタビューや「エリア・カザン自伝」の翻訳、テネシー・ウィリアムズゆかりの土地であるニューオーリンズの旅を通じて、筆者のカザン研究の分析について報告する。

キーワード ウエスレヤン大学
ニューオーリンズ
エリア・カザン
エリア・カザン自伝
テネシー・ウィリアムズ

エリア・カザンは2009年9月7日に生誕百年を迎えた。最近のカザン研究の論点などについて触れてみたい。カザンは2003年9月28日に94歳で亡くなったが、この生誕百年を迎えて、研究書も刊行された。代表的なものはクノッフ社から出版されたロバート・コーンフィールドの「エリア・カザンの演出」(Kazan on Directng by Robert Cornfield Alfred A Knof 2009)だろう。ウエスレヤン大学出版から出版された「カザン再発見」(Kazan revisited by lisa Dombrowski Wesleyan University Press 2011)もある。アルバート・J・デヴリン、マレーネ・デヴリン共著の「エリア・カザンの選ばれた手紙」(The Selected Letters of Elia Kazan by Albert J. Devlin & Marlene. J. Devlin Alfred A Knof 2014)や、2005年に出版されたリチャード・シッケルの「伝記エリア・カザン」(A biography Elia Kazan by Richard Schickel, Harper Collins 2005)もつけ加えていいだろう。

カザン研究は1998年、カザンがアカデミー名誉賞を受賞した前後にその受賞をめぐって賛否両論が沸騰してから少しづつ変化している。最近の研究は、これまでの彼の舞台と映画の演出の手法を、彼が描いた膨大なノートや、原作者や舞台と映画関係者の間で交わされた資料の分析が中心になっている。そうした典型的なものがロバート・コーンフィールドの「Kazan on directng」である。彼はカザンが残したノート、文章、発言を丁寧に洗い出し、カザンの演出の現場を明かしている。実はカザンは、グループ・シアターの時代から、様々な舞台演出の現場をノートに認めてきた。これはカザンノートと言われているもので、その存在はよく知られている。1988年にカザンが自伝を出版してから、カザン研究は画期的とっていいほど様々な事実が明らかになったが、私も「エリア・カザン自伝」を翻訳した時から、文中に度々引用されるカザンノートの実物に触れたいと考えてきた。実はカザンは、こうしたカザンノートや手紙類、メモなど膨大な資料をコネチカットのミドルタウンにあるウエスレヤン大学に寄贈した。この大学は1831年に創設され、1872年には当時革新的であった女性の在籍が認められた女子教育に多大の功績があった大学である。ハンナ・アーレントも教鞭をとったリベラルアーツ・カレッジの名門で、カザンはこの近くに別荘を持ち、60年代からこの大学で講演などをしてきた関係で数多くの資料を寄贈したようである。リベラル・アーツ・カレッジということで映画、演劇、舞踊、美術、建築などの少数教育が知られ、映画アーカイヴも完備され、マイケル・ベイなどの映画人を輩出している。キャンパスはそれぞれの分野でスタジオを持ち、伸び伸びとした非常に明るいキャンパスである。ちなみに最近のカザン研究は、ほとんどこの大学の資料を使っている。私は2012年の夏にここを訪れて、エリア・カザンコレクションを見せてもらった。(このコレクションについては、本学の「Rim」アジア・太平洋女性学研究会会誌(39号 march 2014年)で触れたが、簡単に書いておきたい)

ウエスレヤン大学のエリア・カザン・アーカイヴ

「エリア・カザン自伝」では、カザンはここに資料を寄贈したことなどについては触れていなかったが、ウエスレヤン大学はカザン生誕百年を記念してシンポジウムを開催したり、「カザン再発見」を出版するなど、カザン研究で大きな役割を果たしている。ただ、この大学は最近の情報はあまりなくて、日本で知られているのは平井堅が歌った「大きな古時計」が作られたのがこの大学の所在地であるコネチカットのミドルタウンといったようなことか。「大きな古時計」に歌われたような、古きよきアメリカの雰囲気を残す美しいキャンパスだが、車を持たない私はバスでモーターから通ったので、この周辺の黒人やマイノリティの人の生活の一端も垣間見た印象もあった。このアーカイヴはコーンフィールドさんも使っていて、アーカイヴィストのジョーン・ミラーさんに謝辞を述べているが、私も彼女に大変、お世話になった。ただ困ったことには、ここはガードが厳しくて、アーカイヴの資料は見せてもらえるが、コピーはダメであり、資料を閲覧している間は、ミラーさんが監視?いや、

つきそってくださる。ここに5日間通ったので、大変、仲良くなったり、何よりもカザン情報に詳しく、いろいろなことが話せて、非常に有益だったことは強調しておかなければならないだろう。コーンフィールドさんの著作についても、ここの資料は幾つか使っているが、ミラーさんによれば、重要なものは未亡人のカザン・フランシス夫人から提供されたものが多いという。ということは重要な資料は、すべて寄付されているわけではないということか。コーンフィールドさんの本で、舞台や映画の資料は、あらかじめ読むことができていたが、その分量はこちらが想像していた以上に多かった。(ここではあらかじめ、ミラーさんにどの作品のどの資料が読みたいのか事前にお問い合わせしておかなければならない)ともあれ各作品ごとに分類されたダンボール箱を積み上げられて(全体像だけでも把握したいと思ったが、余りにも分量が多くて、そのボリュームに圧倒された)私の関心が深い「欲望という名の電車」の舞台演出のノートから見せてもらったが、普通の大学ノートに書き付けられた演出ノートである。登場人物、照明、音楽など三つに分類され、舞台での注意事項が書き付けられている。いわば、カザンの肉声であるが、コピーは許されないので、自分でノートに書き写すだけである。コーンフィールドさんもカザンノートからのコピーは「青春の甘き香り」の2ページだけである。結局、許可されなかったのだろうか。

目に付いたのはテネシー・ウィリアムズからの手紙がほとんどタイプでうたれていることだ。(これは後から触れる「エリア・カザンの選ばれた手紙」で編者が触れているように、手紙類をカザンはある時期から保存し、特に重要な手紙は秘書にタイプでうたせていたらしい。メモ魔であり、手紙を書く事の好きだったカザンは、その上、蒐集魔という性格もあって自身の記録を様々な形で残していたのだろう。それが「エリア・カザン自伝」の膨大な記録に生かされ、現在はカザン研究者はその記録の分析に追われているわけである。映画の資料も見たが、ダリル・ザナックからの手紙がとても長文であり、数が多いのが目に付いた。スタジオのタイクーン達とこれほど多くの手紙のやりとりをしているのは、想像外で感動的だったが。

これらの資料は整理されたものではなく、それぞれの作品名別に分けられ、関係者からのドキュメントや手紙が無造作に入っている。これが整理された形になれば、もっと資料としてはもっと使いやすくなるだろうと思えた。

実はそうした思いを叶える本が今年、出版された。アルバート・J・デヴリン、マレーネ・デヴリン共著の「エリア・カザンの選ばれた手紙」(The selected letters of Elia Kazan by Albert J. Devlin & Marlene J. Devlin (Alfred A Knof 2014))である。

友人からの手紙(テネシー・ウィリアムズ、アーサー・ミラー、クリフォード・オデッツ、ジョン・スタインベック、バッド・シュルバーグ、ハロルド・クラーマン、シェリル・クロフォード)また、映画関係ではマーロン・ブランド、それにダリル・ザナックやジャック・ワーナー、また最初の妻であるモリー・サッチャーや、息子のクリス、家族への手紙などを年代別にまとめたもので、「エリア・カザン自伝」と読み比べながら、手紙をあてはめてゆくと、まるでパズルのように、おり重なって内容がより豊かに伝わって来る。カザン研究には

欠かせないものである。

今後のカザン研究は自伝の分析とカザンノート、それにこの「エリア・カザンの選ばれた手紙」が重要資料として使われるだろうと思われる。

ウエスレヤン大学出版「エリア・カザン再発見」

もう一つ重要なのがウエスレヤン大学出版による「エリカ・カザン再発見」の中で綴られた評論家や学者たちの研究だろう。これはウエスレヤン大学の准教授、リサ・ドンブロスキーが編集したもので、現在の立場から、エリア・カザンをあらためて考察してみようと、様々な評論家やエリア・カザン研究者の論文を掲載したものである。エリア・カザン・アーカイヴを持つウエスレヤン大学らしい企画であった。

15人ほどの執筆者が、其々が自由にテーマを決めて書いている。

例えば、映画評論家として著名であり、「伝記 エリア・カザン」の著書もあるリチャード・シッケルは「荒れ狂う河」について書いている。シッケルはニューディール政策映画に取り上げた「荒れ狂う河」は、カザンのデビュー作であるテネシー州の貧困地帯に生きる人々を描いた「カンバーランドの人々」を発展させたものとみている。「カンバーランドの人々」は、カザンがグループシアターに所属していた1937年の作品で、フロンティアフィルムというインデペンデントで制作した短編である。ここでの執筆者はウエスレヤン大学、ハーバード大学、南カリフォルニア大学、ウィスコンシン大学などの大学の研究者が多かった。私にとって興味深かったのは、これまで多く論じられてきた大手スタジオで作った作品よりも、その対極にあるセミドキュメンタリー論が目についたことである。トロント大学のアンドルー・トレイシーは「影なき殺人」と「暗黒の恐怖」に見るドキュメンタリーとデモクラシー」という論文を書いている。「影なき殺人」や「暗黒の恐怖」はカザンが自伝で触れているように、舞台演出家から映画監督になった作品として強調している。ニュースフィルムを取り入れたセミドキュメンタリースタイルは、当時は新鮮で斬新なものであった。（「影なき殺人」はコネチカット州ブリジットポートで実際に起きた殺人事件を題材にしている）

カザンのフィルモグラフィを見てゆくと、ビッグスタジオで有名俳優を登場させた映画の他に、こうしたドキュメンタリースタイルのものや、インデペンデントとっていいような作品が目につくが、そうした作品が本格的にクローズアップされてきたとっていい。晩年に制作したヴェトナム帰還兵を描いた「突然の訪問者」でも少数人数による映画製作を試みている。（これは二番目の妻で、映画監督でもあったバーバラ・ローデンの影響が大きいようだ）

ここでは筆者がエリア・カザンにインタビューした内容や「エリア・カザン自伝」、最近の研究からカザン研究の動向をさらに見てゆきたい。これまで現代演劇の演出家、ハリウッドの大手スタジオの監督とみられたきたカザンだが、映画にも関心を持つようになった若い頃は、ソビエト映画やモンタージュ理論に関心を持っていた。インデペンデント映画「カンバー

ランドの人々」を撮ったように、ドキュメンタリーやセミドキュメンタリーには興味を持っていたとっていい。ハリウッドに招かれて舞台の演出に自信はあっても、映画については何も知らなかったというカザンがニュースフィルムを取り入れたセミドキュメンタリー色の強い「影なき殺人」、「暗黒の恐怖」を舞台演出家から映画監督になった作品として強調していることは興味深い。

さらに筆者が興味を持ったのが、エリア・カザンが描く女性像である。

ウィスコンシン大学のサヴァンナ・リーの「物語のもうひとつの側面 女性たちの痛みを描く監督エリア・カザン」は、フェミニズムの立場というよりも、カザン映画に登場する女性像からカザン論を展開している。取り上げるのは、黒人の血がはいっているのに、肌は白い女性の「one drop of rule」に苦しめられる女性を描いた「ピンキー」、「欲望という名の電車」のブランチとステラ、「草原の輝き」のデニーなどである。これまでカザン映画はマーロン・ブランド、ジェームス・ディーン、ウォーレン・ビーティ、モンゴメリー・クリストフなどによるアメリカの男性像を描いた監督とみられてきたが、女性像を分析することで、さらに深くカザンのアメリカ観というものをよく理解できるのである。そこにはハッピーエンドで終わるアメリカ的な価値観とは、対極にある苦苦痛な味が常にまぶされていた。むしろ非アメリカ的な価値観が濃厚であった。

筆者が最初にカザンにインタビューしたのは1987年第二回東京国際映画祭に「紳士協定」のキャンペーンを兼ねて来日した時だった。1909生まれのカザンはこの時78歳で、自伝を3年間かけて書き上げ、日本への旅は休暇のようなものと、上機嫌だった。赤狩りのことやアメリカへの率直な思い、「紳士協定」に登場する女性像、1950年代のハリウッドと現在との比較、ハリウッドで成功するコツ、監督がハリウッドで成功した理由などを聞いた。印象に残っているのはグレゴリーペックの母親を演じるアン・リヴェールについて質問したとき「私は地中海の人間ですから、理想の母親像は暖かい深い海のような感じのする地中海的な母親像が好きです」と語ったことだった。

リヴェールが演じた母親像は東部の母親像であり、ドロシー・マクガイアが演じた恋人のケーシーについては大学卒で結婚に対して野心的で典型的なアメリカの中流の上に所属する人と発言していた。こうした見解は、最初の夫人である、エール大学総長を曾祖父に持つモリー・サッチャーと結婚して、アメリカ人として受け入れられたと感じながら、最後まで東部エスタブリッシュメントに馴染めなかったカザン像と重ね合わせることが出来る。アメリカについては「ほとんど愛です。私は移民として来まして、アメリカで教育を受け、受け入れられもした。ギリシャ人はここでは少数民族でしたけど、皆が少数民族というわけです。嫌いな部分もありますけど、それは少ないです。ほとんど気持ちとしては愛情です」「私はアメリカのことは好きです。競争は激しいです。それに成功するときは早くするし、失敗する時も早い。しかし私はこの激しさも含めて総て好きです。私が嫌いだったのは不公平があったことです。黒人とユダヤ民族に対してですけど、そういったものは徐々に良くなってきて

います」と答えている。筆者はこの時、アメリカ演劇界の寵児からハリウッドでの成功、さらには映画監督を引退してからも6冊の小説でアメリカ社会とそこに生きる人間像を描いてきたカザンが、むしろ外側からアメリカを考えている人物に思えた。そして「アメリカという国に根を下ろしたギリシャ系移民のバイタリティとエネルギーを感じさせる土の匂いのする人」を書いてこのインタビューをまとめた。この時はカザンが余りにも上機嫌だったので冗談交じりに「来年、夫とプリンストン大学に行くので、翻訳させて欲しい」と、申し出たら「日本でまだ、エージェントが決まっていなかったら、聞いてみてあげるよ」との返事。それから嘘から真のような経過をたどって、「エリア・カザン自伝」との長い付き合いが始まったのだ。

カザンを目の当たりにしての印象はその後も変わらなかった。プリンストンで平積にされた「自伝」を読みながら、カザンがアメリカ社会をどのように見ていたのかが、重要なポイントであった。カザンの眼差しは、アメリカ社会を外側から見るアウトサイダーのようなものを強く感じていたからである。

例えばカザンが興味を持つのは、アメリカ社会の中で成功を収めるマッチョタイプの男性像ではなく、アメリカ社会の中で居場所を見い出せずに、戸惑い苦悩する主人公である。それは4歳の時に旧世界から新世界に移ったアナトリアからの移民の子、エリア・カザンの物語とも重なる。同時にテネシー・ウィリアムズやモンゴメリー・クリストフなど同性愛者への深い理解にも重なるものであった。また、1950年代の時期では、同性愛は明確に描くことはできず、かなりぼかされているが、同時にカザン映画の中で登場する女性像はアメリカ社会の中では当時としては受け入れられない女性像が登場する。黒人の血がはいっているのに、肌は白い女性の現実を描いた「ピンクイ」はアメリカ黒人の混血問題という人種差別の問題に正面切り込んだ作品である。あるいは「草原の輝き」の中で、カンサス州のアメリカの中産階級のモラルに呪縛される若者像だけでなく、その若者の姉で、結婚に失敗した女性が故郷で居場所を見つけることができずに、地域の侮蔑的な扱いの中で、悲劇的な人生に追い詰められてゆく姿を描いている。(バーバラ・ローデンが演じた)

「エデンの東」の母親、キャシー・トラスクに至っては、アメリカ文学史上きってのファム・ファタールである。(しかしカザンは、アメリカ文学史の最大級の悪妻を女優ジョー・ヴァン・フリートに演じさせ、スケールの大きいミステリアスな女性像を作り出すことに成功した)

ところで「エリア・カザン自伝」を読んでいくと、ニューヨークの演劇界とハリウッドを生き抜いてきた演出家の妻のようなものを感じたのだが、同時にすべての活動がカザンの私生活と直結する書きっぷりに、これは私小説作家そのものだと感じ入った。これほど私生活と作品の関係が生々しく描かれた自伝というのも数少ないのではないだろうか。長男のカザンに家業の絨毯販売を引き継がせようとする父親との葛藤、火宅の人であったカザンの女性関係と妻のモリー・サッチャーの葛藤。カザンの恋愛関係はマリリン・モンローや、後

にロバート・キャパの恋人からチェーザレ・パヴェーゼの愛人になったコンスタンス・ダウリングなど華麗なものだったが、常に恋人や愛人に囲まれたカザンの率直な告白は、映画監督と作品の関係を考える上では、非常に興味深い素材である。

そのこともあって「エリア・カザン自伝」はカザン研究の第一級資料となっている。

ここでは、こうした最近の研究を踏まえ、まず、ニューオーリンズの旅とエリア・カザンの関係を見てみたい。いささか個人的な思い出も交えて書き足してゆくことをお許し願いたい。

エリア・カザンと私たちの世代

まず、私がエリア・カザンに関心を持つようになった理由について触れておきたい。ここには個人的な関心と同時に、1960年前後に演劇や映画を学んだ世代のアメリカ演劇やアメリカ映画の感じ方があると思うからである。私は1961年に早稲田大学の演劇科に入学しているが、安保闘争が終わった翌年のキャンパスは「安保かく戦えり」の昂揚感と挫折が入り混じった雰囲気濃厚だった。学生演劇の雄だった「自由舞台」は、政治闘争から一步退いた形で、鈴木忠志や別役実が中心となり、別役実氏の戯曲「AとBと一人の女」、「マッチ売りの少女」「象」などで脱新劇の旗印を掲げて「早稲田小劇場」を設立していた。従って政治路線よりも芸術路線に関心が広がり、スローガンは「脱新劇を」を掲げ、後に新劇の世界を大きくゆるがすことになる小劇場運動の旗揚げだった。こうした芸術路線はチェーホフやテネシー・ウィリアムズへの関心へと向かい、当時の自由舞台に入った私なども「かもめ」や「ガラスの動物園」を上演していたわけである。

一方、演劇科では、映画評論の第一人者だった飯島正教授、歌舞伎の郡司正勝教授、文学座から来た安堂信也教授、アメリカ演劇の倉橋健教授などそうそうたるメンバーがそろっていた。演劇をやるか、映画を取るかで迷っていたが、両方に興味があったので、欲張ってこれらの諸先生方の授業を受けたものである。

エリア・カザンに関心があったのは、演劇と映画の両方にまたがって活躍していたこともあった。早稲田の演劇科に入学した一年生の時に、演劇科の公演として「欲望という名の電車」が上演されることになった。赤狩りの密告者として大きく報じられたエリア・カザンの存在は、演劇科の学生にはインパクトが大きかった時代である。赤狩り事件で友人を裏切り、コミunistの名前を告白したエリア・カザンは密告者として演劇を学ぶ演劇学徒にはマイナスのイメージが強かったと思う。それでも伝えられるエリア・カザンの圧倒的な魅力は、テネシー・ウィリアムズの戯曲の魅力とも重なって、日本ではブロードウェイの舞台化の後、公開された映画「ガラスの動物園」、「欲望という名の電車」、「夏と煙」、「バラの刺青」「熱いトラン屋根の猫」、「地獄のオルフェ」、「この夏突然に」などを通じて、カザンとテネシー・ウィリアムズの人気が高まっていった。舞台では文学座が1953年に「欲望という名の電車」、

民芸が1954年にアーサー・ミラーの「セールスマンの死」をすでに上演していた。敗戦国日本にとって、アメリカは対等な国ではなかった時代に、アメリカの弱い部分を強調したテネシー・ウィリアムズの演劇は、その滅びの美学のようなものも当時の若者には身近で、それゆえに受け止められていった面も強かったと思う。

演劇科の公演で、私に割り当てられたのが、俳優としての黒人女である。一度もアメリカに行ったこともないし、ニューオーリンズなど南部についても知識がなくて、まことに手探りの感じであった。一番困ったのが、演出家が、冒頭、圧倒的な大声で笑うことを要求してきたことである。この笑い声でニューオーリンズの猥雑な感じに引きずり込めと。当時の私は今よりも痩せボッチで、まことに無理な要求だった。

ニューオーリンズの旅

私が訪れたのはニューオーリンズを襲ったカトリーナ台風5周年目の2011年だった。ニューオーリンズを描いた映画作品は、最近では2014年にアカデミー作品賞を受賞した「それでも夜は明ける」は、ここニューオーリンズで撮影されている。これは北部で自由な黒人として暮らしていたノーサップという黒人が南部の綿農園に送られ、12年間を南部の奴隷として過ごさなければならなかった悲劇を描いている。この奴隷労働を強いられる広大な森林地域は、南部の荘園を巡るツアーに参加した時に、ミシシッピ川流域で見かけた広大な沼地と重ね合わせることが出来る場所であった。ミシシッピ川については猿谷要氏の名著「ミシシッピ川紀行」をあらかじめ読んでいたので、大まかなイメージは掴むことができた。実は私にとっては、南部の広大な荘園というのは「風と共に去りぬ」（こちらの舞台はジョージア州のタラ）のイメージが強いが、ニューオーリンズの奴隷市場などの当時の生活を実際の中で見てみたいと思ったわけである。ツアーの中心は「ハウスマンハウス」という広大な屋敷で、現在もここに住むこの邸宅のオーナーらしき人が案内してくれたが、往時は奴隷も抱えていたであろうが、そうした場所の説明や、奴隷制度の話は出なかった。

カザンにとってニューオーリンズは何ととっても「欲望という名の電車」の舞台だろう。アメリカ合衆国ルイジアナ州。ニューオーリンズのフレンチ・クォーターの貧民街。戯曲の中で「欲望という名の電車に乗って、「墓場」という、六つ目の角でおりに言われたのだけれど—「極楽」というところで」（小田島雄志訳 新潮文庫）という印象的なセリフがある。ブランチのたどり着いた人生の最終地点を暗示する冒頭の場面である。おぼつかない物腰のブランチが旅行かばんを下げて読み上げる St Charles Streetcar の路線はすでに廃止されている。その代わりにキャナルストリートの観光用の真っ赤な車体の電車に乗ることはできた。実はこの電車は、終点が本当に墓場に見える場所で、何となく雰囲気を感じることができたが、観光客と地元の黒人たちが乗客で、パワフルな黒人女性が車掌。けたたましいほどの明るさであった。もっとも戯曲に書かれた貧民街は L&N 鉄道とミシシッピ川に挟まれ

て走っている天国通りだが、目にするのは貧民街というよりも観光地の佇まいだった。幸いなことにフレンチクォーターは、カトリーナ台風の破壊を免れて独特の雰囲気を保っていた。どこかいかかわしく、その上卑猥な魅力を持つこの地は、昔は売春宿としてもよく知られている。街中の本屋でそんな写真集を見かけて買った。

今回のもうひとつの目的はテネシー・ウィリアムズの旧居を訪ねることもあった。

テネシー・ウィリアムズはミシシッピ州コロンバス生まれである。先祖は南部の名家に繋がる名門の出身だが、ウィリアムズには没落者としての意識が濃厚だった。高校時代から文筆業を目指したが、ブロードウェイで認められたのは34歳の時の「ガラスの動物園」だった。日本では敗戦を体験した世代から現在まで、滅びの美学を前面に押し出したテネシー・ウィリアムズの戯曲は、現在も上演される機会が多い。そのウィリアムズが長らく過ごし、愛した街がニューオーリンズだった。ウィリアムズはアパートを何箇所か変えているが、「欲望という名の電車」が走っていた境界のロイヤルという通りに住んでいた。現在はアパートは使用中ということで、ウィリアムズが住んでいたということを告げる銅板の告知版があるくらいである。ところで私が使った「ホテルリシュリュウ」の支配人にニューオーリンズにはどんな人々が住むのか聞いてみると「ボヘミアン」という答えが帰ってきたが、他の人に尋ねてもそう言う言い方をする人が多かった。アメリカはナポレオン治世下、フランスからルイジアナ州を購入しているが、奴隷制度に見られるような南部保守の土地柄と見られている。しかしニューオーリンズはそうした面と、様々な文化が入り混じった寛容な土地柄という面がある。保守的な南部で没落者という出自から逃れることのできなかったウィリアムズは、ニューオーリンズに来て、ようやく解放的な雰囲気を味あつたらしい。

カザンはニューオーリンズに長く住んでいたテネシー・ウィリアムズや、リアン・ヘルマンと交流があった（もっともカザンはヘルマンのことは悪く書いている。ヘルマンは日本では良心的な作家として非常に高く評価されていたので、カザンのヘルマン評を読んだときは驚いたが、実はアメリカではヘルマン評価はあまりよくないといったところらしい）カザンには「欲望という名の電車」の他にも、肺ペストに感染した殺人者を追いかける衛生局役人の追跡を描いた「暗黒の恐怖」がある。ここにはミシシッピ川沿いの風景がリアルに描かれたフィルムノワールの秀作である。ニューオーリンズの魅力は様々に描かれてきたが、映画では「イージーライダー」に代表されるように、長髪の若者を殺してしまうような保守的な町と描かれる場合も多い。トルーマン・カポーティもこの生まれと知るとイメージが湧きやすいかも知れない。

ところでフレンチクォーターでは最もホットなジャズスポットと言われるフレンチマンストリート近くの「ホテルリシュリュウ」に泊まった。名前からもわかるようにフランスのリシュリュウ卿に由来している。ロビーには黒人の少年を連れたリシュリュウ卿が川を渡る絵画が飾ってある。ルイジアナ州というのは、フランス植民地時代にはフランスの流刑地で、オペラや映画に登場する「マノン」の最後は、ルイジアナ州の流刑地である。このホテルは

友人に紹介されて宿泊したのだが、ここは大当たりだった。そんなにハイレベルのホテルではなかったが、リアン・ヘルマンが3年間宿泊し、ポール・マッカートニー、ジョン・パエズ、クリス・クリストファーソンなどなど、ハリウッドやブロードウェイのセレブ達が使う隠家だった。オーナーのフランク・ロシュフォール氏は、自室のオフィスに写真を飾っていたが、聞けば全て個人的なお付き合いがある人々という。

カザンは、グループシアター時代の頃から南部を旅している。この頃は南部を知ることが若者の間で流行していた。NY 育ちのカザンにとって南部という土地はどのように映ったのだろうか。カザンのフィルモグラフィを見てゆくと、同性愛者のテネシー・ウィリアムズの付き合いを通じて、南部への関心が深まってゆくことがわかる。グループシアターを通じて、アメリカ演劇から出発したカザンは、1945年の「ブルックリン横丁」からハリウッドに仕事の場を移すが、すぐに進歩派としての地位を確立する。

リベラルで進歩派のカザンがユダヤ問題を取り上げた「紳士協定」ではアカデミー作品賞と監督賞を受賞している。当時の社会問題をハリウッドでいち早く取り上げたわけだから、カザンの進歩派としての評価はさらに高いものになった。ただし東京国際映画祭に来日した時も、「紳士協定」のキャンペーンを兼ねていたが、私のインタビューでも、進歩派のイメージとなったこれらの作品を彼自身は、面白みのない作品として否定的だった。「自伝」でも同じようなことを書いている。

それでは黒人混血女性の問題を取り上げた「ピンキー」はどうであろうか。この映画では北部から南部の祖母の家に帰ってきたという設定で、具体的な地名が書かれているわけではない。黒人の母と白人の父の間に生まれたパトリシアは黒人の血がはいっているものの肌は白い。祖母がピンキーの優秀さを見抜いて、苦しい生活の中から仕送りをして、北部の看護学校を卒業するが、肌の白い白人女性として生きてきた。南部では黒人の血が一滴も入っている女性は黒人とみなされるのだが（「one drop of rule」はミュージカル「ショーボート」にも冒頭この問題が描かれている）、これが多くの悲劇を生んできた。南部に帰ったクレイは、幼い時の呼び方で黒人風にピンキーと呼ばれる。ボストンからパトリシアを追いかけかかってきた恋人の医師は、白人としてパトリシアと結婚したいと考えている。

「ピンキー」では洗濯女として仕送りをしてきた祖母（エセル・ウォーターズ）は、大きな荘園の女主人に仕えている。荘園と黒人の洗濯女の関係などは、南部特有の事情を物語っている。しかしこの映画の結論は、ピンキーの看護婦としての実力と人間性を認めた女主人が、遺産をピンキーに譲りピンキーはその遺産で黒人の病院を建設するという物語である。この映画は近年、エリア・カザンの映画を女性映画として評価する動きがあるが、カザン自身はこの映画を評価していない。この映画はもともとジョン・フォードが監督していたが、帯状疱疹にかかって、急遽、カザンが演出することになった。そんなこともあってか、この作品に対するカザンの思い入れは非常に薄いのである。（「エリア・カザン自伝」では、フォードは病気ではなく、出演者のエセル・ウォーターズと全くそりが合わず、降りてしまったと

カザンは見ている) パトリシアを演じた白人のジーン・クレインなど全ての配役は、フォード監督が決めたままで変更は認められなかった。黒人女優が演じたり、カザンが時間をかけて演出する時間があれば、もっと深みのある映画になったかもしれないだけに残念である。

The recent study of Elia Kazan and visit to places relevant to Elia Kazan

Hide Murakawa

Abstract

Wesleyan University celebrated Elia Kazan's centennial anniversary in 2009 with a retrospective of his films and an exhibition of items from the Kazan collection. This collection of Wesleyan University has important materials of Elia Kazan including correspondences, scripts, notebooks, production documents, photographs, clippings, awards, writings and materials associated with Kazan's life and career.

In 2012 I researched the collection at Wesleyan University. Additionally, I studied the recent publications 「Kazan revisited」 (making Kazan's centennial at Wesleyan University Press), 「Kazan on directing」 by Robert Cornfield, 「The selected letter of Elia Kazan」 by Albert J Devlin & Marlene J Devlin, 「Elia Kazan a biography」 by Richard Schickel

Since my college days I have been interested in Kazan, eventually interviewing him and translating his autobiography 「ELIA Kazan a life」 into Japanese. Here I present my views on Kazan in the light of my research at Wesleyan University and visit to New Orleans, and compare my conclusions with recent trends in Kazan studies.